

音楽

舗道には猫がゆっくりと歩いていた
僕はふらふらとその後を追っていった

あの瞳の閃きは生命の瑞々しい水に違いない

辿り着いた駅で僕はふと気持ちを変え
混雑した電車に無理矢理乗り込んだ
女のふくよかな肌触りに誘われて・・・

あの生活にまみれた苛立ちは何だったのか
そして、こいつらへの侮蔑と嘲笑はどこへ消え去ったのか
あるいは埋もれてしまったのか

電車の揺れにつれて
僕の掌は隣に立つ女の尻を想像の中に感じていった
それは心地良さとは程遠いものだった

あの瞳のどんよりとした色は生命そのものだ

窓外の荒地の小径を歩いていた若者には
夕暮れのオレンジは無意味らしかった
僕は電車の次の駅で降りてそれを捜しに歩き出した
そこを見つけるのはたやすかった

この草々の緑は生命の敗残者にちがいない

おお、既にして死の果てにはびこる者達よ
汚してゆくがいい、そして
腐海へと呑み込ませてゆくがいい・・・

(1991.9.17)